

<新コラム> エイムズ 唯子の『心理学の周辺』

第1回 「周辺」にこだわる

高崎健康福祉大学講師 エイムズ 唯子

(東京生まれ、国際基督教大学教養学部卒業、ミシガン州立大学教育研究科、カナダのゲルフ大学家族関係学研究科を経て、2006年より現職。)

私は心理学者ではないし、これからも心理学者にはなれないけれど、心理学の「周辺」だったら私の居場所もあるかしら、とコラムのタイトルを頂いたとき、胸がときめきました。心を理解しようとする学問である心理学は、心を理解したといえるために、心がどのように機能するか、予測し、コントロール(制御)できることの証左を追求します。認知行動アプローチとよばれる目下主流の心理学は、取り扱い可能な「心」つまり「行動」を実験や観察によって教えたり測ったりしますが、その方法論や結果にいたる論理を支えているのが心理統計です。私は心理学者ではありませんと断言(!)できるのは、確率・統計の数学的センスが、かなしいかな皆無だからです。私が書こうとしている周辺は、まかりまちがっても、中心からゆったりとみわたす「周辺」ではなくて、おずおずと、時には無知を承知で大胆に歩き回る、そんな周辺です。

今回は、自己紹介をかねて、私が居場所としている心理学の周辺の風景をご紹介します。私が現職で取り組んでいるのは、教員志望の大学生に教育心理学を教えることです(いちおう教育心理学の修士号を持っています)。心理学には、教育心理学のほか、社会心理学、臨床心理学、発達心理学などさまざま分野があり、一般心理学という本丸からみるとそれなりに周辺の(?)ですが、私がいるのは、人間関係学ともよぶべき、さらに周辺の領域です。完成に7年かかった博士論文では、日本とカナダの親が、幼少の子どもたちをどのような価値観のもと、どのような具体的な方法できょうだいとして育てているか、そこに文化の差や共通性はあるのか、というテーマを取り上げました。ここ数年は、教師と生徒の関係性というテーマで、現職の高校の先生方にインタビューさせて頂いたことを基に論文を書こうとしています。

さかのぼって思い返せば、大人の話ばかり聞いて、いやな子ねえ、と母に呆れられた小学生でした。母の愚痴やら親戚のうわさ話に、母と彼女を取り巻く他者との関係が、母の言葉によって感情を交えながら

描かれ、そのはしばしに母の価値観が顔をのぞかせているのが、ゾクゾクするほど面白くて、しつこくすり寄って聞いたものです。関係について考えるのが楽しい(得意とは申しません)のは、そこに力関係があるからです。きょうだい関係の社会化で言えば、子どもたちは優位に立とうとしてけんかし、ありとあらゆる方法で親の関心を自分に惹き付けようとするかと思うと、時には互いに協定を結んで、親を困らせます。親も、生物学的な親であるだけでは子に対して力を持ち得ず、子育てという営みのなかで、怒ったりほめたりなだめすかして取引したりするうちに、力を獲得していきます。いろいろな力が交錯するきょうだいげんかの仲裁場面は、私にとっては蜜の味、みんなが必死になっているところをおもしろがって眺めているわけですから、いやなオトナになってしまいましたね。

ところで、心理学は「関係」を捉えることを得意とする学問ではありません。2者関係ならまだしも、3人以上になると、データの測定や結果の予測がととも複雑になるからです。それでも私が「心理学」の周辺にこだわるのは、関係をつなごうとしたり、不具合を調整しようとする「心」の働きを考える上で、心理学にかわる、系統だった拠り所がほかに見つからないからです。心理学は自分にはぴったり合わないし、自分からぴったり寄り添おうという殊勝さも忍耐強さもないので、すこし離れた斜めの視点から心理学を考えたり、教えたりすることは、ちょっとした肩身の狭さを我慢すれば、これはこれで楽しい仕事で、私のライフワークだと思っています。



私の研究室の机の周辺です